

書教育

やっぱり年に一度は
実践の検証を！

伊丸岡 圭一

一 はじめに

今年度の書教育分科会は、レポート参加五名、短大生二名(初日のみ)であった。ことしもレポート参加者のすべてが高校教員であった。毎度毎度、同じことを繰り返すが、小中学校の現場がどうなっているのか、保護者や地域の方が書き書教育にどのような期待をいだいているのかを、もつと知りたい。が、高校教師が日ごろ現場を持っていながら、小中の先生方とつながったり、地域の方とつながるといっては困難なことである。そのような中では、唯一、小学校への出前授業や地域開放講座の実践をされている野坂共同研究者の報告は貴重である。

今度から、分科会報告がウェブ掲載形式のみとなったことにより、この分科会の存在がどう広がりを見せてくれるのか。調べる意志と機会があれば、過去数年間の分科会報告もネット上にアップ、公開されているので、ぜひともこの分科会の魅力に気づいていただけないものかと、かすかな期待を寄せるばかりである。

二 各レポートから

(1) 多様な学習者層への実践

パフォーマンス書道、というのだろうか。昨今、全国のあちこちで、高校生たちが巨大な紙に何人もが総掛かりで、あるテーマにそったフレーズや詩句、さらには図柄、彩色などを添えた作品を、音楽に乗せながら短時間で仕上げていく芸の披露が大流行のようである。テレビではその競技会までが報じられている。

音更高・野坂氏は高齢となった、**小学生高校開放講座**において、夏にはジャンボ書道と題する巨大共同制作作品、冬には書き初めといった催しを手がけているとの報告である。町内の閉校記念式典において**パフォーマンス書道**が取り組まれ、児童十一名で「絆」という十一画の字を共同制作したとのことである。また、同校において開催される学校開放講座には、同校の書道部員二〇数名が運営に関わり、町のイベントにもかり出され、若い力を発揮しているという。

氏の別の報告は、本職である高校生徒に、これまた**卒業記念の巨大共同制作作品**を制作させ、卒業式に飾るといいう取り組み

の報告であった。三人以上でグループを作り、誰かに感謝の気持ち伝えるというテーマで、言葉選び、構成、彩色などを考えさせ、作っていくというもの。その作品群を今回の会場に展示し、鑑賞させていただいたが、これはまさに生徒も教職員も、参列の保護者にも喜ばれるであろうという迫力ある作品群であった。

この実践の中から、氏は「発達障害」を持つ子どもについての考察を報告されている。昨年度のこの取り組みの中では、無気力、多動、発達障害傾向の子どもが多く、不安も抱いたが、子どもたち同士では支え合いが見られたという。自閉系、アスペルガー系の子もたちは昔もいたが、いまは顕在化してきており、増えているのだという。また、発達上の訓練不足からいじめも起きるといふ。さらには、卒業生の例として、就職先で、パートのおばさんたちにかまわれているうちに（もちろん悪意があるはずもなく、親しみを込めてかまっていたのだろうが）、それが嫌になつて職場を辞めてしまった子がいるという。放つていてくれれば続けられていただろうに、普通に挨拶などでもできる子だっただけに、親愛の情の表し方も、今の子どもにはケースバイケース、難しくなつてきているとの指摘だったと思われる。

野坂氏からはさらに、**小学生を対象にした「出前授業」**の報告、**一般住民を対象とした学校開放講座**で提供した、書道史の資料など、貴重な資料の提供もいただいた。本当にエネルギーッシュで、多様な年齢層、学習歴の学習者相手の種々の実践には頭の下がる思いである。

(2) 厳しい自己省察とともに

札幌東陵高・小笠原氏からは、現在の自身を内省され、授業作品とともに氏の授業構築を報告された。

氏は学校におけるすべての場面において、誠実にその責務を全うされているようにうかがえる。担任業務、分掌業務、部活動、そして何よりの授業である。すべてにおいて静かにプランが練られ、そして静かに、また厳しく自身を振り返る。生徒たちにはまさしく安心して頼れる存在なのではないだろうか。

学校祭、進路指導などが相重なる時期でも、生徒たちはじつくりと筆を執って作品作りに集中する。先生自身には焦る思いや悔いる思いもあるだろうが、生徒たちが授業に集中するところ、日ごろの実践の一つの答えがあるのではないかと。教師はいろいろな立場を兼ねて多忙な思いを抱えていながらも、生徒たちは先生を信頼しているからこそ、**安心して墨香に没頭**できているのだろうと感じた。



(3) めまぐるしく変化する環境の中で

芦別高・中谷氏は、めまぐるしく変化する学校環境について報告した。学科転換、間口減。これは他府県ではあまり耳慣れない学校用語かもしれない。同校では、旧芦別総合技術高（さらにその前の旧芦別商業高なども含めて）の流れをくむ情報ビジネス科と普通科との「ミックスホームルーム」という工夫されたシステムで授業が展開されている学校であった。当時の教職員の英知の結集であったろう。それが全クラス普通科へと学科転換、間口減とも相まってめまぐるしく教育課程が変わり、加えて（というか、逆に）教員定数が年々減ってゆき、落ち着かない環境のようである。はたして同校の教育課程に書道は残せるのか、生徒のための教育課程ではなく、そこにいるスタッフ（在勤教師）の都合次第による教育課程になることを危惧する。

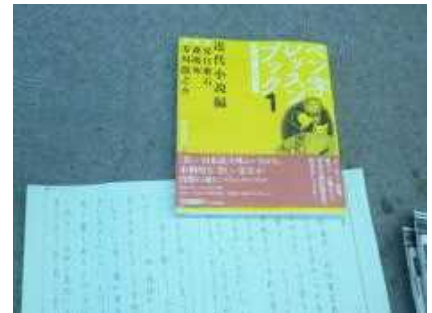
氏は書道、国語の二教科で各学年にまたがり、**週に五種類の授業**を担当されている。筆者も、新卒で勤めた学校では七種類の授業を担当したことがあり、前任校でも四種類。国語と書道の兼務をする教員は、全道にどのくらいいるのであろうか、本当にがんばっている。他府県ではそもそも「書道」教員の採用であるから、本道のように安易な国語書道兼務、**安上がりな二教科兼務教員**は存在しない。こんな教育施策を何十年も放置し、その苦勞を甘んじて担ってきた教師たちにこそ、ボーナスや昇給で報奨してもバチは当たらない。

氏の報告の中で、いわゆる「実用書」の指導をいかにするか、という問いかけがあった。卒業生が働く商店で書いてもらったのし紙の字がひどかったという話を聞き、その卒業生が書道を選択していたことに愕然としたと語る。そこで、**小筆やペン字の指導**に工夫を取り入れ始めたとのこと。いまや「美文字」ブームであるが、市販のテキストを早速涉猟し、授業に取り入れられている。氏の第一の良さは、すぐに行動に移す潔さである。迷わない、ぶれない、常にまっすぐ。まだまだ若い教師であるが、であるからこそ、見習うべきことの多い報告であった。

(4) 進化するおじさん

苫小牧西高・磯角氏の発想力と実行力にはいつも脱帽させられる。

たとえば漢字の結体（字形）の指導において、「文字外形の縦横長比を『プロポーション』、文字の重心から左右上下の空間の取り方を『バランス』と称して、文字の形の取り方の認識を促す」という、ネーミングの楽しさは、学習者の親しみやすさにつながり、スムーズなレディネスへとつながるであろう。前出・中谷氏（芦別高）の、様



々な事象をオノマトペで表現してしまう方に劣らぬものを感じる。

また、磯角氏の実践報告では、**映画鑑賞とその作品化**というものがある。映画は『夕風の街・桜の国』、『イン・アメリカ』。映画自体に感動はするものの、では作品化する段になると、どう表現して良いか悩むようだ。中には「縦書き」を左から右へと改行する作品があり、日常的に「横書き」主体の書字習慣のなせる技かと指摘している。

氏は毎年「もやもや」というオノマトペをキーワードにレポートを書いておられるが、今年の「もやもや」の一つに、発達障害を持つ生徒の対応を挙げています。ノート取りの速度、片付けの粗雑さなどから、「**発達障害の有無や程度で成績が付いているのではないか**」との危惧は、重要な指摘と言えるだろう。

他にも、線質学習の工夫やビデオカメラ導入による指導方法の工夫、書体指導の順序の検討など、常によりよい方向へと改良を試みられている。昔この会で、筆者は「進化するおじさんをめざす」宣言をしたが、いま磯角氏こそ、まさに「進化してやまないおじさん」なのではあるまいか。

(5) 賢治詩に重ねる理想像

最後に、単発教材について、筆者**東川高・伊丸岡**（筆者）が行った報告を記す。

題材は、**宮沢賢治の「雨ニモマケズ」**の長編詩である。全30行を、半切ヨコ型に全文写す。次に、その中で、最も気に入った（共感した）一節（一行ではない）を選んで、それを**聯1/2サイズ**の作品にする、という二段階（二作品）の制作である。聯に選んだ一節は、なぜそのフレーズを選んだのか、文章化もさせる。

この単元は実は、自習や時数調整などのため、単発（二時間連続の授業一回のみ）で実施したものの。結果は、たいへんよく集中して取り組み、「**気に入った一節**」というのもまた、自分をよく見つけた結果の表れということがうかがえ、おもしろい授業となったという報告である。

生徒たちがどの部分に共感したのか、そしてその理由の文章を多数挙例したが、いまどきの高校生たちの感性の傾向がうかがわれるようでもしるかかった。多かったのは、

「丈夫ナカラダヲモチ」

「慾ハナク決シテ瞋ラズ イツモシヅカニワラツテイル」

「ヨクミキキシワカリ ソシテワスレズ」

「サウイフモノニ ワタシハナリタイ」

あたりであろうか。これを言い換えると、

①健康であること、②無欲もしくは寡欲でがつがつせず、しかも温厚な人柄であること、③勉強ができるようになること、



④**全体に賢治の願いに共感する**、そんな理想像を持っているようだ。これは他の学校の生徒ならどんな傾向が出るのか興味深い所であるが、とありあえず落ち着いた、寡欲で温厚な生徒の多い同校生徒の傾向が如実に表れた作品制作結果である。



三 おわりにく討論のまとめと今後の課題

今回の研究集会では、発達障害児（傾向の子どももふくむ）の話題が特徴の一つだった。ほとんどすべての中学生が高校に進学する現在、小中高すべての学校現場には、何らかの発達課題を抱えた子どもが存在することは珍しくはない時代になった。「特別支援」体制をどの学校でも準備することになっていく。

私たちは、こうした子どもたちが、課題を抱えつつも、書の授業を心待ちにし、楽しむ姿に接する。一方で、周囲の子どもたちとどう関わらせるのか、できないことがそのまま評価にながっていいのか、という課題提起もあった。今後、そうした事例の報告も待たれる。

児童生徒たちにとって、学びの楽しさ、学びの実りの多さが実感できる学校でありたい。とりわけ私たちにとっては、書の授業が充実している、楽しい、必要だ、という声が多くなる仕掛けを工夫したい。それは何も展覧会入賞の多寡ばかりではない。どんな様子の学校で、どんな日々の取り組みがなされているだろうか、ということに尽きる。

私の学生時代の恩師の言葉であるが、教職に就いたら、最低年に一本の研究論文もしくは教育実践をまとめるよう努めるべきだ、といわれた。私はこの研究会を通じてそのことを守ることができていく。年に一度、我が身を振り返り、他者の実践に学ぶ絶好の機会である。

今回、このウェブ掲載の分科会報告、どれほどの方の目に触れることになるのか見当も付かないが、保護者や地域一般の方々の参加はもとより、これから教職に就こうと考えている学生の方々、いま毎日多忙な教育現場にある方々、次回から大いに語り合ってください、さまざまな思い、さまざまな事例とともに語り合いますよう、心からお誘い申し上げます。

（東川高校）